

ドイツの大学における日本語教育 — 授業経験からの一考察

飯島昭治 Iijima, Shôji

(ハイデルベルク大学、東アジア研究センター、日本学研究学科
Universität Heidelberg, Zentrum für Ostasienwissenschaften,
Institut für Japanologie)

要旨/Zusammenfassung

ドイツの大学、特に日本研究学科の日本語教育について、実際に授業を行った経験から、いくつかの重要と思われる点について考察を加えた。

まず、ドイツの全体的な日本語教育の場について、および大学における日本学、日本語教育について概観し、ドイツの大学における日本語教育の位置について考える際の参考とした。

日本学研究学科の日本語教育で、前提とすべきこと、問題となることの中から、学習到達目標と授業時間数、教授法としての翻訳の問題、また、現代日本語と文語の間、日本語教育担当教員とその他の教員の間で問題になる可能性のある文法用語について考察した。

Nach den Erfahrungen von über 24 Jahre Lehrtätigkeit am Institut für Japanologie der Universität Heidelberg werden in diesem Artikel einige zusammenfassende Überlegungen zum Unterricht Japanisch als Fremdsprache, besonders für das Fach Japanologie, angestellt.

Ausgangspunkt ist dabei die Beobachtung, dass die allgemeine Lage für Japanisch als Fremdsprache in Deutschland und an den Hochschulen oft übersehen wird. Zu den wichtigsten Faktoren des Unterrichtes von Japanisch als Fremdsprache als Bestandteil des Faches Japanologie gehören z. B. Studienziel und Unterrichtsstundenzahl, die Problematik der Übersetzung als Unterrichtsmethode und Fragen zur Terminologie der Grammatik, in der zwischen Schriftsprache und Japanisch als Fremdsprache unterschieden wird, was wiederum zu Differenzen zwischen Sprachdozenten und Fachdozenten (Professoren) führen kann.

1 ドイツにおける日本語教育機関概要

ドイツにおける日本語教育実施機関は、大きく4つのグループに分けられる。1) 各都市の市民講座で実施されている最も広い範囲の日本語教育 (Japanisch-Kurse an der Volks-

hochschule)、2) 中学・高等学校レベルでの日本語教育 (Japanisch-Kurse am Gymnasium)、3) 大学での日本語教育、4) その他の機関である。

1) ドイツにおける市民講座 (Volkshochschule) は、全国の町以上の自治体にあると言えるが、日本語講座を持っているのは、普通、市レベル以上であろう。そこでの日本語教育は、地域的に、また学習者の年齢層などからみて、最も広い範囲で実施されているものと言える。ほとんどは、週 1-2 回のコースで、1 回の授業時間は通常 90 分である。また、コースのほとんどは初級段階のもので、中級段階のものもいくつかあるが、上級段階のものはほとんどない。

2) 中学・高等学校 (Gymnasium) での日本語教育は、ギムナジウムで 9 年生 (日本の中学 3 年生に相当) ぐらいから週 1-2 回の授業が 3-5 年間行われる。学校によって、正規の授業 (第 3 外国語) として実施されているものと、課外授業 (Arbeitsgemeinschaft) として実施されているものがある。

3) 大学での日本語教育は、大きく a) 日本学研究の一環としてのもの、b) 日本学ではないが歴史、経済研究などの中に日本研究があり、日本学研究ほどではないが、ある程度の集中的な日本語教育が行われているもの、c) 日本研究はなく、一般言語コースの一環として行われているもの、いわゆる全学対象日本語講座がある。

a) では、日本研究が主専攻ないし副専攻として行われ、多かれ少なかれ集中的な基礎 (初級) コースの他、中級、上級のコース、文語、漢文のコースなどかなり多岐にわたっている。

b) では、主専攻としてではないが日本語学習が必須とされ、日本学研究よりは少ないが全学対象よりは多い時間数の日本語教育が行われている。文語、漢文などはない。

a) b) とともに、日本研究に必要な日本語能力の養成が目標とされ、それに見合う授業時間数があり、それなりのスタッフがいる。日本語教育担当教員は、期限なしの常勤講師、最高 5 年の期限付常勤講師、非常勤講師となっている。

c) としては、軽重はあるとしても、ほとんどの大学で実施されているといえる。多くが週 1-2 回の授業で、1 回の授業時間は 60-90 分、ほとんどが初級コースである。

- 4) その他の日本語教育機関としては、a) 言語専門教育（研究）機関、b) ケルン日本文化会館（日本国際交流基金）、c) 在独日本公館（領事館など）がある。a) は、ボーフム大学外国語教育研究所日本語学科とフランクフルト日本語普及センター（民間）である。

本論では、大学（高等教育機関）、特に日本研究における日本語教育（上記(3) a, b 参照）に制限して検討を加えたい。

ドイツには、高等教育機関として計 415 校がある（2009 年現在）。そのうち総合大学は 89 校である。日本研究学科（a および b）のある大学は、以下のごとく計 20 校である¹。

- a) ベルリン自由、ベルリン＝フンボルト、ボーフム、ボン、デュッセルドルフ、エアランゲン、フランクフルト、ハレ、ハンブルク、ハイデルブルク、ケルン、ライプツヒ、ミュンヘン、トリア、テュービンゲン（=15 大学）
- b) デューイスブルク、コブレンツ（私立）、ルードヴィックスハーフェン、マンハイム（=5 大学）

日本学研究学科のある大学も含めて、約 90 校の総合大学、そして、その他規模の大きな工科大学などの多くの大学でいわゆる全学対象の日本語教育が実施されている。その数はおおよそ 100 校前後と推測される。

日本学・日本語学習学生の実数は、正確な統計もないし、学期によっても異なるので正確なところは不明である。しかし、上記の日本学科に約 4000 人、全学対象に約 5000 人、総計約 9 千人から 1 万人程度の学生が日本語を学習しているものと推計できる。

2 日本研究学科における日本語教育の目標

では、日本研究学科で行われている日本語教育とは、どのようなものであるのか。

一般に、ほぼ共通して、4 学期（2 年）間の基礎課程で集中的に初級日本語（プラスアルファー）が学習される。5 学期以降でも日本語教育が続けられるが、集中度は基礎課程に比較してはるかに低くなる。それぞれの大学、学科で相違が

1 ドイツ語圏の大学としては、オーストリアのウィーン大学、スイスのチューリッヒ大学にも日本学研究学科がある。

あるが、4 学期間を通じて、通常週 6 時間前後から 10 時間前後の日本語授業がある²。

日本研究学科での日本語教育の目的は、前述のように研究、修学に必要な日本語言語能力の養成にある。それを重要な順にあげれば、第一に専門文献の読解力、第二に必要な資料や情報を収集するための質疑応答力、第三に講演や授業などでの聴解力、第四に討論に参加できる聴解、発話力であろう。

第一は必須のもの、第二はある程度必須、第三と第四はできた方がいいが、とりあえずの段階では不十分でも勉強はできるとみなされ、第二以下のものは付随的に養成されればよいというのが一般的ではないだろうか。理想としては、全体的に CEFR での B1 レベル以上ということができるとは、読解力以外の能力は、より低いレベルにとどまるというのが実情ではなかろうか。また BA 課程の導入に伴い、修学目標は低くなる傾向にある。

しかし、現実には、第一の読解力の養成も、基礎課程の 4 学期間は言うに及ばず、全修学期間を通じて十分な成果が上げられているとは言えない。かろうじて、やや長期に日本に留学した学生のうちの一部が達成できるレベルではなかろうか。また、読解力以外の養成を意図的に目指しているところでも、日常会話能力以上の聴解、発話能力養成まではできないのが現状で、これも日本留学などに期待しているのである³。

では、第一の専門文献の読解力には、何が必要か。大きく分けて、1) 単文はもちろん複文（重文）レベルの文のまとまりである段落程度の理解力（特に大意把握力）と 2) 語彙理解力に分けられる。そのうち 1) では、1-1) 単文構造理解を基礎として、1-2) 名詞修飾構造および 1-3) 文接続構造のすみやかな理解力が必要である。

2 BA 課程の導入に伴い、多くの大学で日本語教育の授業時間も変更されている。第 4 学期までよりは時間数が少ないが、第 5,6 学期まで日本語を必須とするところが多い。当ハイデルベルク大学日本研究学科では、1 学期から 5 学期まで各以下の時間の授業を実施している。(1) 18, (2) 11, (3) 9, (4) 9, (5) 4。

3 日常会話の養成と言っても、それほど簡単に習得できるわけではなく、かなりの時間がかかる。その場合、特に形式的な文型中心の練習のみが長期に続くならば、学生の表現したい内容と表現能力との間に大きなギャップを生じ、学習継続上の重大な問題になるケースがよくある。

そのうち特に、2) では、日本語の語彙の多さが問題となる⁴。語彙の多さは、言語表現の豊かさの一つであるが、外国語として学習する場合一つの大きな障害になる。その語彙学習の鍵、あるいは中心問題となるのが漢字であろう。それも、漢字の理解力である。現代日本語においては、知られるように常用漢字は 1945 字⁵であるが、使用漢字は約 3,000 と言われている⁶。辞書を使いながら読むことを考えても、基礎知識として最低 1,500 ないし 2,000 字程度の漢字の知識が必要であろう。また多くの漢字は、多義多音であって、このことが、日本語における漢字理解と学習を非常に複雑なものにしている。

勿論、語（熟語）の形成には、意味に基づく規則や傾向があって、一定の制限があるが、もしそれを無視して仮定の単純計算をすれば、平均 2 字熟語であるとする、2,000 字の漢字で 4 百万語が作られうる。これは、学習の難しさを表わしているとともに、基礎知識を持っていれば、多量の語彙理解力（構成力）を持ちうるという漢字の大きな長所をも示している。つまり、漢字は学習上大きなハードルであるが、同時に日本語の語彙の多さに対する非常に有効な「解決の鍵」でもある。また、ここで注意を促したいことは、漢字の理解力、つまり読むこと、意味を理解することが重要であって、書くことは必ずしも必要ではないということである。

4 日本語の語彙の多さについて『語彙の研究と教育（上）』で、次のように述べられている。「日本語では、10,000 語で 91.7%のカバー率になることが報告されているが、これは、英仏西 3 言語の上位 5,000 語のカバー率よりも低いのである。（上位 5,000 語では、英語：93.5%、仏語：96%、スペイン語：92.5%、日本語：81.7%）まとめると、日本語では語彙面で 90%以上の理解を可能にするためには、上位約 10,000 語を覚えなければならず、基本語彙というときにも最低 5,000~7,000 語が必要になるということである。」（国立国語研究所（玉村文郎他）1984、『語彙の研究と教育（上）』日本語教育指導参考書 12, p.102-3）

5 現在、国語審議会において常用漢字の見直し、追加作業が進められており、ほぼ最終案が公表されている。それによると、従来の常用漢字から 5 字削除、196 字追加、計 2136 字が新たな常用漢字となるもようである。

6 国立国語研究所調査、1966 年一年間の新聞 3 社（朝日、毎日、読売）のサンプリング調査延べ約 100 万字(99,1375 字)の異なり字数は約 3200 字(3213 字)である。（日本語教育学会編(1982)『日本語教育事典』大衆館書店、p.472）なお、その調査によれば、基本 10 字で 10.6%、500 字で 79.4%、1,000 字で 93.9%、2,000 字で 99.6%である。

3 日本語教育の授業時間

日本語能力の習得には、個人差などの様々な条件があつて、単なる授業としての学習時間だけで見ることではできないが、あえて一つの目安と考へて、日本語教育のためには、どのぐらいの学習（授業）時間が必要であるかを見てみたい。

當作靖彦氏は、Diller (1978) を引用しつつ、次のように述べている。

「Diller によると、（英語を母語とする学習者が）通常の会話能力を得るのにスペイン語、フランス語の場合、平均的成人で 720 時間、アラビア語、中国語、日本語の場合には 1950 時間かかる。この数字と（アメリカの大学での通常の学習時間）480-600 時間を比較した時、悲觀的にならざるをえない。⁷⁾」

一般に日本語教育では、ごく大まかに初級、中級、上級それぞれ約 300 時間が必要であるとされている。これは、週 25 時間の集中講座で、それぞれ 3 か月、計 9 か月かかるという計算である。大学予備教育としての日本語教育などで実施されている時間であるが、漢字圏の学習者ないし既習者を除いて十分な学習時間とは言えない。しかし、中級、上級を別にすれば、初級 300 時間というのは、比較的信頼できる数字と思われる。⁸⁾

ドイツの大学で週 8 時間あるいは週 10 時間といつても、多くの場合 c. t. (cum tempore)⁹⁾で行われており、実質的な授業時間はその 4 分の 3 である。そして、フルに授業をするとしても、各大学にもよるが冬学期、夏学期ともに 15 週間（計 30 週間／年）である。仮に、週 10 時間（実質 7.5 時間）として、

7 當作靖彦 (1985) 「コミュニケーションの能力開発を助ける日本語クラス—理論と実践」（日本語教育学会編 (1985) 『日本語教育』 56 号、p.97-109）。

8 初、中、上級をどのように定義するかは、実は難しい問題であり、初級を除いて、それほど明確かつ一般的な定義があるわけではない。例えば、定義の一つの例として『日本語教育事典』に各級レベルの学習目標と 4 技能の学習段階が述べられている。（『日本語教育事典』 p.633-640）

9 ラテン語の cum tempore の略で、習慣化している。仮に 60 分の授業時間とすると、15 分遅れて始まることをいう。大学での授業時間が休み時間などを組み込んでいない場合が多く、授業が同じ場所で行われるとは限らないこともあり、休み時間や移動の時間が必要であり、それに当てられる。

各学期 150 時間（実質 112,5 時間）である。基礎課程を 2 年（4 学期）としてその終了までに計 600 時間（実質 450 時間）である。

前記の日本での学習時間にあてはめれば、450 時間の学習時間というのは、いわゆる初級段階が一応終り、中級の前半が終わった段階（中級前期修了）といえるだろう。前述の日本学のための必要日本語能力は、読解力だけに限ったとしても、上級のレベルが要求されているのであって、これと週 10 時間、4 学期の学習時間を見合わせるならば、當作氏ならずとも悲観的にならざるをえない。

では、それらの条件の中で、どのような対策が考えられるだろうか。ここでは、いくつかの可能性について検討してみたい。

- 1) まず、学習時間数を必要なまでに増加させること。1950 時間は無理にしても、通常の倍の週 20 時間にすれば、4 学期（2 年間）で 1160 時間（実質 870 時間）となり、ほぼ日本での 9 か月の集中講座に匹敵する時間数となる。これは、日本の大学で勉学するための基礎的日本語能力の養成時間数とほぼ同じであって、もしそうするならば、JSP（Japanese for Specific Purpose）などの考え方のごとく、目的意識的に目標・シラバス・教授法を設定して行えば、ドイツの日本研究における専門課程のための言語能力習得（読解力養成）の可能性がかなりあるということを示している。
- 2) 第 2 に考えられることは、抜本的に学習・教授法を改善し、より短時間のうちに目標レベルに到達するようにすることである。勿論、実際には、夢のような革命的方法が生み出されるとは思えないし、例え改善されたとしても、倍の効果、つまり半分の時間数で目標が達成されるようになるとも思えない。しかし、その「理想」に向かって、教師、学生の一人一人が常に取り組んでいることも事実である。
また、多くの場合、学習は主に一人一人の問題であるとして、学習者の努力と能力にほとんど依存している、というのが現状ではあるまいか。
- 3) 第 3 に、必要な習得目標の中から一部分だけ選択してそれに集中して学習時間を短縮することが考えられる。何を選択するかは、それぞれの場所、条件で異なるであろうが、最も可能性の高いものは、会話力養成は捨てて、文法のみ、あるいは読解力のみにする、といったことである。この場

合の授業は、いわゆる訳読法で、典型的な例として、日本の中・高校での英語教育がある。日本語教育では、主に日本語のテキストを読んでドイツ語に翻訳し、文法を解説するという授業である。

しかし、このことには、何を選んで、どのようなシラバス、カリキュラムを作るかという問題の他に、部分的な学習で効果を上げることができるか、というより根源的な疑問もある。

私の所属するハイデルベルク大学日本学研究学科では、軽重はあるが上記の三つを組み合わせる解決策を探っている状態である。前記のように、現在は 18/11/9/9 (13.5/8.5/7/7) 時間の授業時間数となっている。教材や教授法の改善もできるだけ行うようにし、目標の制限もある程度行っているが、日本学研究(勉学)のための日本語能力養成のためには、まだまだ不十分であって、学生の自助努力に俟つところが大きいと言わざるをえない。

4 翻訳・訳読法と日本語(外国語)教育

ドイツの大学の日本語教育を教授法の面から見れば、多くの場合、主流は文法解説と翻訳を中心とする授業であると思われる。これは、意図的に種々の教授法の中から訳読法(Grammar-Translation-Method)を選択している。あるいは、前記のごとく教育の場の様々な制限や条件を考慮して、その方法を選んでいたのであろうか。いささか極端に言うならば、条件や目標、教授法などの検討なくして、何となくできるものをやるといった状態、あるいは教師自身が外国語を学習した時の教授法を踏襲して「選んでいる」のではないかと思われる。

では、日本語(外国語)教育における翻訳をどのように考えるべきであろうか。実際に教室で行われている順序は、1) ある文を示し、2) その文を音読し、3) そこに現われた新しい(と思われる)文法項目を解説し、4) その文をドイツ語に翻訳することである。時間があれば、3) でその文法項目について、いくつかの練習をし、4) で内容について質疑応答をする、といったところが一般的、伝統的な授業ではないだろうか。

では、翻訳するという時、何を翻訳するのであろうか。一般に言語(ここでは、日本語が起点言語、ドイツ語が訳出言語であるが、)は、意味の単位からみて、語/句/文(単文、

複文) / 文章 (段落程度の意味のグループ) / 章または論文などに分けることができる。

語 (単語) には、普通いくつかの意味があり、そのどれを取るかは、句以上、あるいは談話の文脈による。また句にしても、いわゆる常套句を別にすれば、それだけでは意味をそれほど明確に断定できない。文の段階で初めて各語や句が位置づけられ、意味を持ってくる。しかも、文も段落以上の (談話と言ってもいいが、) コンテキストの中で表現すべき内容が決まってくると言える。また、段落も論 (談話) 全体の中で位置付けられ、その表現上の役割が与えられるべきであろう。

つまり、翻訳する場合、論 (談話) 全体の論旨に沿った段落の中で文が取り上げられ、訳出言語に置き換えられなければならない。一つ一つの語や句や文が訳される場合でも、一つ一つの意味が分かっていたとしても、論 (談話) のコンテキストの中で意味が確定し、訳出言語が選択される。会話の場合でいえば、場面の中で翻訳 (通訳) されなければならない。理想的な翻訳は、一語一語翻訳することではなく、言語感覚も含めたコミュニケーションの内容をできるだけ正確に伝える (置き換える) ことである。翻訳とは、二つ以上の言語生活に通暁している言語能力があって初めて可能である。

しかし、外国語教育 (学習) の目標は、目標言語を理解し、使ってコミュニケーションできるようにすることにある。目標言語を聞いたり読んだりして、その意味を理解し反応すること、伝達事項を目標言語によって表現することである。言い替えれば、目標言語そのものを修得しなければならない。ある言語表現を理解することは、必ずしも翻訳することと同義ではない。翻訳して理解したという場合、目標言語を理解していない場合の方が多いのではないだろうか。訳出言語表現を理解しているにすぎないのではないだろうか。外国語言語学習では、翻訳によって目標言語表現の意味を理解することに留まらず、更に目標言語そのものの表現を直接理解するという段階に至らなければならない。もしそれを怠るならば、翻訳は外国語修得上大きな障害になりうる。仮に日本研究の日本語教育の最終目標が翻訳力の修得であっても、翻訳するということが両方の言語に通暁して初めて可能なものである以上、一つの外国語を習得する過程である日本語学習は、翻訳とは別のものである。

訳読法 (Grammar-Translation-Method) を批判する立場から生まれた Natural Method や直接法は、媒介言語を使用しないことを原則としている。しかし、外国語教育において翻訳が意味を持っていないということもない。また、外国人も多数いるといっても、ドイツの大学ではドイツ語を媒介言語として使うことができる。語彙や句の意味を、常に場面や多くの例文または実物や絵などでいちいち理解させることは、時間的にも不経済かつ不可能である。ドイツ語で語や句の意味を与えることは、より早くよりよく理解する上で非常に有効である。無論、その場合、常に実はコンテキストの中で語／句の意味が選ばれ、与えられていることを認識している必要がある。

単語レベルや、文レベルにおいても、基本的な意味を与えることは意味がある。理解し納得していない語や文を記憶することは非常に難しい。また、語や句、文を聞いて（あるいは読んで）その意味をできるだけ早く理解し、反応しなければならない。そのための基礎的な学習過程として、耳や目を慣らすために二言語間の短時間内での置き換えなど、練習としては意味がある。

しかし、その場合、必ず目標言語（日本語）に戻る必要がある。語と語の組み合わせ、句の組み合わせとしての文の段階では、本来の語や句の意味を離れてしまう場合が少なくないし、翻訳すれば、1語につき1語としては対応しない表現になることも多い。文のレベルでも、コンテキストの中で意味を捉えた場合、両方の言語における構文そのものが必ずしも対応しないことが少なくない。

つまり、外国語教育（学習）の中では、基礎的部分の意味を理解するために、コンテキストを踏まえた部分的訳は有効であり、語や文を習得する初期的課程として訳（変換）は意味があるが、翻訳そのものはできるだけ制限されたものであることが望ましい。目標言語は、その言語そのものとして理解されるべきである。言語は、解読されるべき「暗号」ではないのである。このことは、特に初級段階について言うことができるが、一方、中級段階以上では、意味の理解としては翻訳に頼らなければならないことはより少なくなって、部分的な翻訳しか必要でなくなる。

もし、読解力の養成だけを目標とするのであれば、訳読法は意味がある。しかし、その場合も一度訳出した後で、必ず最低もう一度起点言語である日本語に戻って、日本語そのものを理解するということが必要条件である。前述のように大

学の日本研究に必要な言語能力は、第一に読解力であろうから、その意味では有意義と言える。

だが、訳読法には聞く話すなどのいわゆるコミュニケーション能力養成のためには絶対的な制約があること、あるいはそれを無視していることを認識している必要がある。また、読解力も、聴解力や発話力と結びついていて、読解力のない学習者は語彙や表現力が広がらないし、発話力のない学習者はより早く読むことができない。

5 文法用語について

日本では、いわゆる教科（学校）文法と日本語教育での文法はかなり異なるが、ドイツの大学においても、特に日本学研究における日本語教育において、文法用語に関して問題になることがしばしばある。それは、一つには、日本学研究においては、多くの場合現代語とともに文語日本語の学習が行われ、双方での文法用語が違うことからきている。また、教員である日本研究者が、1950年代までに日本語を学習したか、その流れをくむ教授法によって学習した場合、1960年代以降に訓練を受けた日本語教育教師と使用する文法用語が異なる。

現代日本では、主に二つの流れの文法用語が用いられている。一つは、いわゆる教科文法（学校文法、国語文法とも言われる）である。これは橋本進吉の文法学説を中心としてまとめられた文法体系で、1943年以降、現在まで、中・高等学校の国語文法として使われている¹⁰。

もう一つは、外国語としての日本語教育のための文法体系で、特に1960年代の日本語教育の普及とともに広範に用いられるようになった。

国語辞典などの文法用語は、伝統的に教科文法の用語が使われているが、最近では日本語教育の影響もあり、一部、日本語教育の文法用語を使っている国語辞典も見られるようになった。

この違いは、日本語を対象とする言語学にも現われていて、従来のものが「国語学」と言われるのに対し、日本語教育から発展した言語学として「日本語学」が成立している。森田良行氏は「日本語学の出発点」として以下のように述べている。

「ここでことさら『日本語学』と銘打ったのは、国文法を日本文法、国文学を日本文学と呼び換えたのとは根本的に

10 橋本進吉（1943-45）『中等文法』、文部省。

意味をことにする。『日本語学』はそれらと歩調をそろえて『国語学』を今風に言い換えたわけではない。同じ一つの言語を対象としていても、国語教育と日本語教育とではその内容にも教育の在り方にも相違があるように、国語学と日本語学にも学問の出発点として、言語に対する分析や記述の在り方自体がそもそも異なるのである。¹¹⁾

現在の日本語教育は、日本語学文法用語を使用して、実施、研究、開発されている。国語教育とは基本的に異なった条件、環境の下で研究、開発されたものであり、教授法とも密接に結び付いている。つまり、日本および世界の日本語教育では、ほぼ「新しい」文法用語を使った日本語教育が行われていると言ってよい。

一方、ドイツの多くの日本学研究学科においては、文語教育が行われており、文語教育においては、新しい文法用語を使用した教授法は開発されていない。また、現在出版されている国語辞典は、日本語学からの影響で一部新しい文法用語が使われ始めているとは言え、圧倒的多数は、教科文法用語を使用している。もし、学習者が、国語辞典を使用するようになるならば、教科文法用語の知識も必要である。

このギャップを埋める対策として、初級当初は日本語教育文法を主に使用しながら教科文法用語もできるだけ提示し、文語教育に入る時、あるいは国語辞典を使用できる段階に入った時、両文法用語の比較対照が行われることが望ましい。もちろん、その両方の文法用語について、現代日本語と文語日本語の教員は承知しておく必要がある。

品詞と動詞活用形について、比較対照の例を以下一覧表として示す。この他、文語文法入門を考慮するならば、形容詞（い形）の活用、形容動詞（な形）の活用の比較対照、また口語と文語の両方にわたって動詞の活用の区別、動詞の活用別種類¹²⁾を示す必要がある。

11 森田良行（1996）「日本語学の構想」（『日本語学』（1996年）7月臨時増刊号—日本語学の世界—、明治書院、第15巻 第8号 通巻第171号、p.10-16）。研究雑誌『日本語学』（明治書院）は、1982年に創刊されている。さらに、その前身である『月刊 文法』は、1968年から3年間発刊された。

12 知られるように、動詞の活用別種類は、口語では5種類、文語では9種類である。日本語教育では、通常3種類（名称は異なるが、5段活用、1段活用、変格活用の三つ）に分けられる。

(a) 品詞について¹³

教科文法用語	ドイツ語	日本語教育用語
1) 動詞	Verb	動詞
2) 形容詞	Adjektiv	イ形 (容詞)
3) 形容動詞	Nominaladjektiv	ナ形 (容詞)
4) 名詞	Nomen / Substantiv	名詞
5) 代名詞	Pronomen	名詞 / ここ、そこ、あそこ etc.
6) 副詞	Adverb	副詞 / ゆっくり、たいへん etc.
7) 連体詞	Adnominalwort	- / ある、あらゆる etc.
8) 接続詞	Konjunktion / Bindewort	接続詞 / しかし、また etc.
9) 感動詞	Interjektion	- / ああ、ええーっ etc.
10) 助動詞	Hilfsverb	- / ます、です、だ、ない etc.
11) 助詞	Partikel	助詞 / は、が、の、も、か etc.

(b) 動詞の活用 (Konjugation des Verbs)

教科文法用語	ドイツ語	日本語教育用語
1) 未然形	Form für Negation	1-1 ない形 (否定) れる / られる (受け身、 可能、尊敬) せる / させる (使役) 1-2 う / よう (意向)
2) 連用形	Fortsetzungsform Verbindungsform	2-1 ます形 / 連用形 2-2 て形 ～た (過去)、たら、たり
3) 終止形	Finalform	3&4 辞書形 (Neutralform)
4) 連体形	Adnominalform	
5) 仮定形	Konditionalform	5 ～ば (已然形 - 文語)
6) 命令形	Befehlsform	6 ～e / ろ (命令形)

文法用語の差異は、国語学と日本語学の違いの一つの具体例でもある。例えば、知られるように、動詞の活用形は、次に続く語によって何形かを知ることができる。しかし、この区別の仕方は、国語文法の区別の仕方であって、次に続く語が何かという知識のない学習者にとってどれだけ意味があるかは疑問である。ここには、国語学と日本語学との基本的な考え方の違いの一つがあると思われるが、ここではこれ以上の検討はしない。

13 教科文法では、表にあるごとく 11 品詞とし、その他として、接頭語 Präfix および接尾語 Suffix を上げるのが常である。ここでは、教科文法用語にあてはまると思われるドイツ語もあげることにした。表中、日本語教育用語の括弧は、両方を使用している場合、または語そのものを言い文法用語を使用しない場合を表す。また「-」は、用語がない、あるいは使用しないことを表す。

6 まとめに

ドイツの大学の日本学研究学科における日本語教育は、前述のように、基本的コースとしてほぼ週 6-10 時間、4 学期（2 年）間、またはそれ以上にわたって行われる。世界的に見ても、日本の大学予備教育を別にすれば、それほど少ない時間数ではないといえることができる。また、非常に大切なことは、それらの講座を実施しているところでは、大なり小なり学習者をして、日本語能力を身につけさせようとする意思を持っていることである。このことから、ドイツの大学における日本語教育は大きな可能性を持っているといえることができる。

しかし、現実には、その日本語教育は問題なしというわけではない。日本研究が要求する日本語能力は非常に高いが、それに見合った学習時間、教育条件が与えられていない。日本研究に要求される言語能力は、少なくとも読解力に関しては上級以上のレベルであるが、例え週 10 時間 4 学期の学習を終了したとしても、名目 600 時間（c. t.での授業の場合実質 450 時間）である。これは、前記の 1950 時間には比較できないが、前記のように、日本でごくおおざっぱに必要なとされる時間に比較すれば、中級前期修了の時間である。

実は、日本語学習においては、発音や基本文法を内容とする初級の段階は、比較的学習しやすいのである。前に漢字と語彙の問題について触れたが、そのことからしても、特に漢字圏以外の学習者にとって、実は中級後期、上級の学習のためにこそ多くの時間が必要であるといえることができる。

仮に、読解力の養成に集中するとしても、いわゆる初級レベルに匹敵する総合的基礎能力が必要であり、その上に読解力養成に集中した学習が積み上げられるべきであろう。とすれば、初級の教育に少なく見積もって 300 時間前後が必要であり、残りの 150 時間前後が特に読解力養成を目指した教育に向けられるといえることができる。この条件では、初級の段階から強い目的意識を持って、非常に効率的に学習が行われた場合でも、いわゆる上級レベルの入口に達することがやっとなであろう。そのためには、目的に合ったよい教科書と教材、よく計画された効率的な授業、そして何よりも学習者に強いモチベーションを持たせ日本語学習に集中させることが必要であろう。

以上のことは、現実には非常に難しい。周知のように、ドイツの大学における日本語教育に適した教科書があるとは言えず、それぞれの教師が悪戦苦闘して教材を作っているのが

現状であろう。また、目的と情況・条件を正確に把握し、シラバスの選択、カリキュラムの作成、授業の実施などがあまり問題なく行える能力を持った日本語教師がどれだけののだろうか。また、教師そのものが、そのような条件、待遇を与えられているだろうか。

ドイツの大学も BA（学士課程）の導入などで大きく変わろうとしているが、一人一人の能力は別として、ドイツの学生は、複数専攻制の下で、一方では日本語学習に集中することはそれ程やさしいことではなく、他方、他の学習との兼ね合いで、それ程長期に日本語学習に集中することもできない。

筆者は、当初、ドイツにおける日本語教育、具体的には日本学研究のための日本語教育の現状、目的が把握できず、とにかくコミュニケーションで通すべきだと考えていた。それはそれなりに意味があったと思われるが、今まで述べてきたことを考慮するならば、いわゆる初級段階はコミュニケーションで行うべきであるが、その段階でも日本学研究のための日本語教育という目的をより鮮明に持ち、初級段階から読解力養成を重視する必要がある。また、学生（学習者）の本来の要求とも合致することであるが、読解とも関連させながら、要約や意見のまとめとその発表などのための学習が必要であろう。

また、別の面からすれば、外国人用に書き下ろされた学習のためだけの日本語をできるだけ制限して、普通に使用されている日本語、いわゆる生教材あるいはそれに類似するものを教材とすべきであろう。

以上、ハイデルベルク大学日本学研究学科における授業の経験を基に日本語教育について検討を加えた。基礎資料としての数字などできるだけ正確を期したつもりだが、細部にわたって万全とは言い難い。願わくは読者諸氏の訂正、ご指摘を請う次第である。また、本小論を論議の一つの材料としていただき、ご批判をいただければ幸いである。